

藤並の森

Vol. 79



リレー随筆

土佐流飲ん兵衛の系譜

吉田類

「男も女も大酒飲みでしよう?」

僕の出身県が高知だと知ると、こんな一言から酒場談義の始まることがある。高知が、他県と比べれば酒飲みに対して寛容なのは確かだろう。生まれ育った山村の記憶を辿れば、祝宴などで振る舞われる酒量は底なしだった気がする。もつとも、これは昭和30年代ころの話だ。もはや2〜3昼夜も続く祝宴は昔話なのかも知れない。

とはいっても、高知流の飲酒スタイル『返杯』は受け継がれている。相対する二人が、一つの猪口で交互に飲み干し合う。小さな猪口ながらこの『返杯』を延々と繰り返すうちに深酒となつて羽目を外す。あるいは料亭へと繰り出し、土佐伝統のお座敷遊び『箸拳』や、京の花街から伝わったという囃子唄『ベロベロの神様』に合わせての一気飲みで弾ける。なんとも華やかで豪快な土佐人の飲みつき振りが浮かぶ。

僕は12歳で故郷を離れた。思い出に残る酒宴は、あくまで地域共同体の結束を図るためにもの。氏神様のもとに集まつた大人たちが車座となつて御神酒をいただく姿だった。当時、山間の集落でも過激な政治思想を持つ者同士の確執はあつた。けれども、酒の席では政治信条が異なつても分け隔てなく乾杯する。たとえ口論となつて決裂しても、翌朝どちらか一方が泥酔し

ていたのを理由に平身低頭詫びれば済む。酒宴の場では社会的地位の上下も思想信条の区別もなく、平等だったという印象が強い。『土佐日記』の冒頭部分に国司・紀貫之が帰京する送別シーンが記されている。現代語に訳してみると。

“十二月二十四日、……身分の上下を問わずあらゆる人々、子供までが酔っ払つて浮かれ遊ぶ。一の字も知らない無学な者が足を十の字に交差させ、千鳥足で乱れ踊る”。誰とも知れぬ人々までも続々と集つて国司様の送別会とやらに打ち興じ、酔い痴れる様子が伝わってくる。歌仙・紀貫之は、土佐の地で最愛の娘に先立たれた喪失感を詩情豊かな歌と日記で綴つた。同時に、土佐人の底抜けに開放的な飲酒気質が古から連綿と続いていることを詳らかにしてくれる。

僕が初めて『ベロベロの神様』の囃子唄を教わったのは京都祇園のお座敷。たちまちお囃子に馴染んでしまう自身を知る。こんなお座敷遊びを京の花街に根付かせたのは幕末の土佐藩士たちではなかつたろうか。

我もまた土佐流飲ん兵衛の末裔に違いないが、いずれの真相も白磁徳利の闇の中。

(酒場詩人)



酒と文学展

『土佐日記』から吉田類まで

題字／吉田類



平成29年
11月25日(土)
▼
平成30年
1月14日(日)
企画展示室
観覧料500円

※12月27日～1月1日は
年末年始のため休館

開館20周年の「二十歳の文学館」となる記念の年に開催される本展覧会は、土佐酒の歴史、土佐酒を愛する人々によって育まれた皿鉢や座敷遊びなどの酒文化から、作家と酒の物語や酒を描いた文学作品の紹介、吉田類さんの酒場俳句を紹介する特設コーナーなど、さまざまな角度から高知の文学と酒についてご紹介します。

土佐の風土や文化と密接に関わりながら執筆された酒にまつわる文学と、酒を愛した作家たちの味わいをお楽しみください。

導入にあたるこのコーナーでは、高知県のお酒について紹介します。高知県にある酒蔵と文学とのかかわり、お酒の歴史や造り方、高知県の酒器やお座敷遊び、高知の肴について作家が語った言葉のご紹介などを、高知県で使われていた酒器、皿鉢の数々（高知県立歴史民俗資料館蔵）、中村恭子筆「皿鉢絵」（個人蔵）などを通じてご紹介します。

高知の文学と酒の物語を、「作家と酒」「出来事・作品に見る酒」の二つのコーナーにわけてご紹介します。

2 土佐の酒と文学の系譜



▲中村恭子筆「皿鉢絵(部分)」(絹本着色 平成27～28年制作)



▲吉井勇歌軸「友いまだ……」

・出来事・作品に見る酒

こちらのコーナーでは、お酒に関する出来事にかかわった作家や、お酒が重要な装置となる作品を書いた作家をご紹介いたします。

・作家と酒

高知の作家がどのようにお酒を飲み、どのように文学作品へ反映させてきたかと云うことは、時代ごとに、そして作家ごとに違っています。

たとえば旅と酒を愛した大町桂月は、酒を飲むと筆が進むという人でした。アルコール中毒になつて一度お酒を断つものの、再びお酒を飲みはじめます。その背景には、「少しでも世の為めになる文章をかくより外に、余の天職は無い」（大町桂月「断酒より節酒へ」）という作家としての矜持がありました。

また歌人の吉井勇は、父の負債の相続や最初の妻・徳子の恋愛事件などが重なり、失意のうちに歌行脚をする中で高知を訪れます。そこで「瀧風（高知酒造）の社長・伊野部昌吉の父であつた伊野部恒吉と出会い、一緒に酒を酌み交わした猪野々の人々と友人伊野部の人情に救われ、やがて新しい歌境を開き、歌人として復活を遂げます。しかし3年後の昭和16年11月、伊野部が死去。吉井は追悼の歌

を30首近く詠んでおり、友人を失つた深い悲しみをうかがうことができます。

こうした作家と酒の物語を、貴重な資料とともに紹介いたします。桂月が書いた扁額「断酒は易く節酒は難し……」や、杉浦重剛が桂月を心配して「これ以上飲んではいけない」と送つたという桂月愛用の瓢箪、友を失つた悲しみを詠んだ吉井勇の歌軸などの資料を通して、それぞれの作家の生き方を感じて頂ければと思います。



▲桂月愛用の瓢箪



平成29年
11月25日(土)

▼
平成30年
1月14日(日)
企画展示室
観覧料500円

※12月27日～1月1日は
年末年始のため休館

☆展示解説

展覧会担当者による
展示解説を行います。

毎週土曜日

各日とも午後1時半～
(約20分)
参加には当日観覧券
が必要です。

こちらのコーナーでは、仁淀川町出身で、現在「酒場放浪記」(BS-TBS)などで人気を集めている酒場詩人・吉田類さんをご紹介します。類さんはシユールアーティスト、俳人、随筆家としての顔を持つだけでなく、山や釣りを愛するナチュラリストとして、また最近では映画「今宵、ほろ酔い酒場で」で活躍する俳優として、多角的な魅力を持つています。こうした類さんの感性をはぐくんだ故郷仁淀川町の美しい自然や、類さんの描いた俳画や愛用品などを展示し、改めて類さんの魅力を感じていただきたいと思います。

明治期の度重なる酒税増税の中、酒造家のちを救うために奔走した植木枝盛と「酒屋會議」の話、今は閉店した高知の文化人たちのサロンの役割を果たした居酒屋「とんちゃん」とそこに集った作家たち、また山本一力『牡丹酒』など、高知の作家はさまざまな酒の物語を紡いできました。「日本全国ノ酒屋ヲ開カントスルノ書」(高知市立自由民権記念館蔵)、「とんちゃん新聞」など、こうした物語を感じることのできる資料とともにご紹介いたします。

3 吉田類さん　酒場俳句

酒は古くから土佐の国で愛され、作家や文学者にも深い影響を与えてきました。酒や物語は時代を映し出すとともに、作家がその時代をどう生きたのか、ということを私たちに伝えてくれます。

この展覧会を通して、高知の風土が育んだ酒文化の豊かさと、酒によって紡がれていた作家たちのさまざまな物語をお楽しみいただければと思います。

(学芸課／川島禎子)



吉田類俳画

◆関連企画のご案内◆

■吉田類さん記念講演会「酒場詩人　ふるさとと文学を語る」

仁淀川町出身の酒場詩人・吉田類さんによる記念講演です。

酒、俳句、釣りに旅……人生の楽しみを究める類さんのトークをお楽しみください。

- ・日 時：12月2日(土) 午後2時～(開場 午後1時30分～)
- ・場 所：高知県立文学館1階ホール
- ・定 員：100名(電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。)
- ・参加費：当日の観覧券が必要となります。

■類さんとミニ句会　吉田類さんと一緒に「酒」をテーマにした俳句を楽しんでみませんか？

- ・日 時：12月3日(日) 午後2時～(受付時間 午後1時30分～)
- ・場 所：高知県立文学館1階ホール
- ・講 師：吉田類さん
- ・参加費：当日観覧券が必要となります。

【句会参加希望者】

自作の句を一句ご記入の上、FAX、郵送、文学館受付にて事前申し込み(定員40名、定員を超えた場合は抽選)。〆切は11/20(月)。

※ご記入事項…住所、氏名、電話番号、「酒」を兼題として、晚秋から初冬の季語を入れて詠んだ句(1句)

※皆さんの句をまとめて、天(1位)と地(2位)を選んでいただきます。その理由を一人一人発表。最後に吉田さんが天と地を選んでその日の「天」と「地」を決定します。

【句会聴講のみ】

電話または文学館受付にて事前申し込み(定員60名)。※俳句を作らず聴講のみご希望の方。

■お楽しみクイズイベント

- ・日 時：1月2日(火)、3日(水)、13日(土)、14日(日) 各日とも午前9時～午後4時
- ・場 所：高知県立文学館2階
- ・参加費：当日観覧券が必要となります。
- ・定 員：なし
- ・申 込：不要(当日会場までお越しください。)

他にも朗読の会など多彩な関連企画を用意してお待ちしています。

常設展虫がね

シリーズで、変わる常設展示をご紹介！

高知県立文学館では、いつも新しい発見、新しい
体験をしていただけます。展示入替を行っています。
今年度は「自由民権」コーナー・中江兆民、
「反骨の大衆文學」コーナー・田岡典夫、
「現代の文学」コーナー・田宮虎彦、
「近現代の詩歌」コーナー・若尾瀬水をご紹介しています。

展示作家紹介 田岡典夫

田岡典夫は歴史小説に優れた作家で、思想家・
田岡領雲の甥にあたります。

1908(明治41)年、田岡増猪・はまの子として
長崎に出生しました。生後一週間ほどで父が病死
したため、増猪の長兄典章・寿子夫妻の実子として
届けられ、大阪で育ちます。

その後帰郷し、旭小学校に入学。しかし理不尽
に怒る教師に腹を立ててその教師を殴打し、城東
中学校を退学しました。権力に対する反骨精神は、
のちに作家となつた典夫の作品にも見られるもの
です。その後さまざまな学校を中退したのも、權
力の横行する学校組織になじめなかつたからかも
しません。その傍ら、独学で作品を書き、次第
に創作を志したようです。

パリ留学、日本俳優学校卒業を経て、典夫は高知
市出身の作家・田中貢太郎と出会い、本格的に文学
の道に入ります。「博浪沙」の編集に携わる一方で、
土佐の風土に生きる武士の世界を描いた歴史小説
に独自の風格と味を發揮し、1943(昭和18)年に
直木賞受賞。毎日出版文化賞を受賞した『小説野
中兼山』全三巻は、その集大成です。



▲展示風景

第十二回

1982(昭和57)年4月7日朝、静岡県熱海
で死去。満73歳でした。墓碑は高知市旭天神
町の田岡家墓所にあります。

この展示は「志国高知 幕末維新博」の関連
コーナーです。田岡典夫が幕末の土佐に題材を
得て書いた作品の多くは、権力者ではなくそれ
に翻弄される立場の人が、そうした状況下でも
自分の意思を貫く姿が多く描かれており、歴史
の表舞台とは違う視点から幕末の空気を感じる
ことができます。

その他、文壇デビューのきっかけとなつた
菊池寛の書簡や典夫の愛用品など、雑誌「博浪沙」
の編集を通じて文学者と交流し、多くの人に
愛された典夫の温かい人柄を浮かび上がらせる
展示となっています。

(学芸課／川島禎子)

11月12日(日)、第20回児童生徒文学作品朗読
コンクール審査が開催されました。今年の8月
に県内三箇所で行われた地区審査の参加者44校
133人から、県審査に選出された24名の児童
生徒の皆さんが、豊かな朗読をしてくださいま
した。皆さん、会話文と地の文をうまく読み分
けて、情感たっぷりに読み分ける朗読のレベル
の高さは、さすが県審査だと感服しました。
審査後の講評時に、「間」は朗読において、とても
大事な要素の一つだというお話をありました。
「間」は聞く人に想像させる時間、物語の場面を
深める時間となるそうです。

今年は朗読コンクール20周年の節目の年で、
永年朗コンに取り組んでくださった学校に「学
校賞」をお送りしました。朗読は読みを深める
だけでなく、世界にたつた一つだけの自分の声
で表現し、感動を伝えることで豊かな心を育む
活動として、文学館も次の10年、20年に向けて
精進していきたいです。

特別審査委員には高知県出身の絵本作家、
西村繁男先生をお迎えし、記念講演会「人と出
会って絵本が生まれる」を開催しました。先生
のお人柄溢れる語り口から、絵本誕生のお話を
うかがうことができました。鏡川でよく泳いで
いたという子ども時代のお話から、大学時代に
田島征三氏に出会い、絵本作家を志したこと、
将来を真剣に考えたとき、好きなこと、得意な
ことを伸ばすことを考えてみてください、とい
う子どもたちへのメッセージもいただきました。

「どちらいち」は日曜市に出かけて、「多様なも
のが共存する」場が面白いと感じたことや、市
の中で面白いものをメモやスケッチして絵本に
落とし込んで描いているというお話、編集者や
広島の語り部の方とのある人との出会いがきつ
かけで「やこうれっしゃ」や「絵で見る日本の

審査結果は以下のとあります。(敬称略)

金賞	中土佐町立久礼中学校3年	濱田 鳥太
特別賞	西村繁男賞	
	黒潮町立上川口小学校2年	高田 咲来
特別賞	教育長賞 高知市立鶴田小学校5年	山下 泰知
郷土文学賞	四十万市立中村小学校6年	山下 謙久
銀賞	土佐中学校1年	林 莉唯
	土佐市立高岡中学校3年	長家 美岬
	いの町立枝川小学校3年	中越 仁菜
	土佐市立蓮池小学校5年	森田 蘭奈
	土佐市立蓮池小学校6年	尾崎 小桜
	高知大学教育学部附属小学校6年	市川 七望
学校賞	高知市立義務教育学校土佐山学舎6年	小松 孝男
	高知大学教育学部附属小学校	
	土佐女子中学校	
	高知市立潮江東小学校	

その他、13名の方が入賞されました。



(学芸課／谷岡真衣)



歴史などの名作絵本が生まれた経緯を楽しくお話し下さいました。表彰式の後に

はサイン会も快く応じていただきました。20年の節目を迎えた朗読コンクールも、保護者の皆様、指導をされた先生方のご協力で今まで続けることができました。改めて御礼を申し上げます。

20年の節目を迎えた朗読コンクールも、保護者の皆様、指導をされた先生方のご協力で今まで続けることができました。改めて御礼を申し上げます。

平成29年度 第20回児童生徒文学作品朗読コンクール

しばてん小説——田岡典夫の龍馬もの——

猪野 瞳



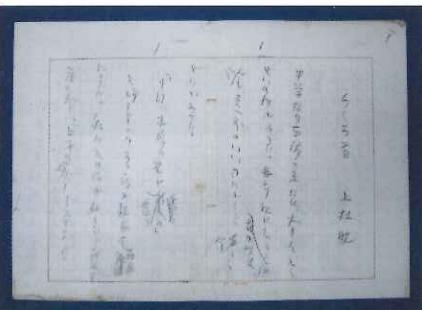
資料受贈報告

—寄贈資料から—

上林 晓草稿「ろくろ首」

1969(昭和44)年4月30日

B4判400字詰原稿用紙・鉛筆書
大熊平城氏寄贈



受贈報告(平成29年7月~10月)敬称略
▼嶋岡 晨・「彼岸酒」
鶴岡 晨著 朝日書林刊他
▼田島征彦・「のら犬ボン」
田島征彦作 くもん出版刊
▼小学館・「記憶の断片」
宮尾登美子著 小学館刊
▼藤本知子・「紙芝居」
卒業式の先生の声 村上 清話
市原麟一郎脚本 藤本知子絵 市原麟一郎刊他
▼中川 滋・「平出修研究」第49集 平出修研究会編刊
編集委員会編 土曜美術社出版販売刊
▼佐々木靖章・「山河」第5号 濱田知章編 山河社刊他
▼小松弘愛・「詩と思想・詩人集」2017 「詩と思想」
西岡寿美子著
▼西岡寿美子・「詩集シバテンのいた村」
西岡寿美子著
土曜美術社出版販売刊他
▼菅野笛子・「詩集たんだ翅を傾けて」
菅野笛子著
ふたば工房刊
▼楠瀬勉久・「詩集 SHORT STORY POEMS」
不無非未 根津真介著刊他
▼山沖素子・「風へIV・言葉に宿るもの」
山沖素子著
ふたば工房刊
▼森下千恵・「句集 老うぐひす」
森下千恵著刊
▼前田欣一・「合同句集道 元夏爐同人会編刊」

戦後のいつときRKCラジオに「おんちゃんスモどろう」というシバテン人気番組があった。土佐弁でおもしろく語りかけ話題をひろげた。しばてんは夕暮れの薄暗がりの槐樹やせんさんと通行人をおびやかす小妖怪という噂が伝つていた。

酔っぱらいが一晩中相撲をとり、泥もつれになつて朝方帰つてくる。狸に化かされたという話とともに、しばてんにやられたとも言われた。田岡典夫も少年時代、高知市旭の屋敷の周辺には、まだ田んぼもあり、水の流れる小川もあり、その小さな閑から水の落ちるドンドもあり、しばてん探しに夜でかける回想もかいていた。

戦後二年目に文庫本の「しばてん」をだした。紙のない時代でひどい仙花紙の黄色い字のうすい今でいう粗本だった。これに三本の小説

しばてんは夕暮れの薄暗がりの槐樹やせんさんと通行人をおびやかす小妖怪という噂が伝つていた。

酔っぱらいが一晩中相撲をとり、泥もつれになつて朝方帰つてくる。狸に化かされたという話とともに、しばてんにやられたとも言われた。田岡典夫も少年時代、高知市旭の屋敷の周辺には、まだ田んぼもあり、水の流れる小川もあり、その小さな閑から水の落ちるドンドもあり、しばてん探しに夜でかける回想もかいていた。

戦後二年目に文庫本の「しばてん」をだした。紙のない時代でひどい仙花紙の黄色い字のうすい今でいう粗本だった。これに三本の小説

しばてんは夕暮れの薄暗がりの槐樹やせんさんと通行人をおびやかす小妖怪という噂が伝つていた。

酔っぱらいが一晩中相撲をとり、泥もつれになつて朝方帰つてくる。狸に化かされたという話とともに、しばてんにやられたとも言われた。田岡典夫も少年時代、高知市旭の屋敷の周辺には、まだ田んぼもあり、水の流れる小川もあり、その小さな閑から水の落ちるドンドもあり、しばてん探しに夜でかける回想もかいていた。

戦後二年目に文庫本の「しばてん」をだした。紙のない時代でひどい仙花紙の黄色い字のうすい今でいう粗本だった。これに三本の小説

しばてんは夕暮れの薄暗がりの槐樹やせんさんと通行人をおびやかす小妖怪という噂が伝つていた。

酔っぱらいが一晩中相撲をとり、泥もつれになつて朝方帰つてくる。狸に化かされたという話とともに、しばてんにやられたとも言われた。田岡典夫も少年時代、高知市旭の屋敷の周辺には、まだ田んぼもあり、水の流れる小川もあり、その小さな閑から水の落ちるドンドもあり、しばてん探しに夜でかける回想もかいていた。

戦後二年目に文庫本の「しばてん」をだした。紙のない時代でひどい仙花紙の黄色い字のうすい今でいう粗本だった。これに三本の小説

上林 晓(1902~1980)は、高知県幡多郡田ノ口村(現黒潮町)出身の小説家。本名・徳廣巖城。妻を看取つた体験を曇りのない眼で描いた代表作「聖ヨハネ病院にて」をはじめ、私小説によつて文壇に確かな足跡を残した作家です。

1962(昭和37)年、五高時代を過ぎた熊本等を訪ねる予定であつた九州旅行の直前、上林は脳溢血を再発し、右半身不随となります。しかし、翌年には口述筆記による「白い屋形船」を発表。1966(昭和41)年には左手による食事や筆記の練習を始め、徐々に執筆を再開します。右の草稿「ろくろ首」は、そうした中で書かれた直筆資料です。上林は、この大患後、家族に支えられながら、病床にあつて終生書き続けた不屈の作家として知られます。本稿はその人となりを示す資料と言えます。

寄贈者・大熊平城氏は、上林 晓のご令孫。今回ご寄贈いただいた資料は、上林旧宅(杉並区天沼)に保管されていたもので、一緒に保管されていた草稿「イタチの話」「八百屋のおかみさん」もあわせてご寄贈いただきました。これら3作は、原稿末尾の日付からほぼ同時期に執筆されたものと見られ、全集未収録作を収めた『ツェッペリン飛行船と黙想』(2012年、幻戯書房刊)で初めて発表されました。「ろくろ首」は上林の中学時代の逸話、他の2作は父や子にまつわる逸話が書かれており、どこか明るくて飾り気のない、上林らしい作品です。

(学芸課／小松路代)

志水辰夫さんから、貴重な資料の数々をご寄贈いただきました！

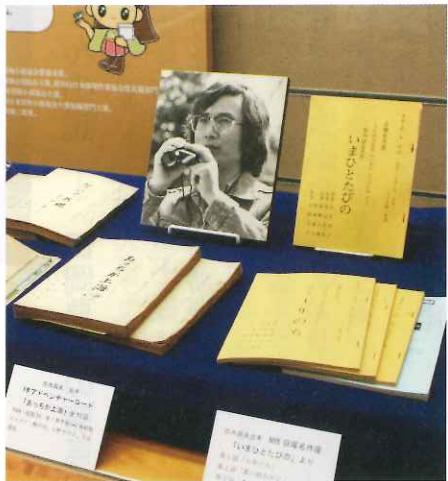
志水辰夫（本名・河村光暁）さんは、1936（昭和11）年12月17日生まれ。高知県出身。

高知商業を卒業後、公務員などを経て、40代で本格的に小説を書き始めました。高知文学学校の卒業生です。1981（昭和56）年8月に『飢えて狼』（講談社刊）でデビュー。叙情的な文体で冒険アクションから恋愛小説、時代小説まで手がけており、その筆は「このミステリーがすごい！」などでも高く評価されています。

特に初期にはクライマックスを散文詩のように謳いあげ、シミタツ節の異名をとりました。一方でコメディも手がけるなど、作風の幅は広く、多くのファンの心を捉えています。

1990（平成2）年には『行きずりの街』新潮社が大ヒットし、この年の日本冒険小説協会大賞を受賞しました。また、「このミステリーがすごい！」では、1992（平成4）年度、第1位に選出。2007（平成19）年には1年間で約50万部を売り上げるベストセラーになりました。この作品は、2010（平成22）年に映画化されています。

2007（平成19）年には、初の時代小説『青に候』新潮社を上梓。以後時代小説も書いています。



▲展示風景



この度、志水辰夫さんから、文学館20周年を記念して、初期の直筆原稿、翻訳本、ラジオドラマの台本などをご寄贈いただきました。

直筆原稿は、一字一字丁寧な楷書で書かれており、几帳面な志水さんの様子が窺われます。近年では、パソコンを駆使しておられますので、初期の直筆原稿はとても貴重です。

デビュー作『飢えて狼』や『裂けて海峡』『散る花もあり』（3部作の「折れて帆檣」を改題）などもご寄贈いただきました。

これらの原稿は、刊行本とは内容的に異なる部分もありますが、その違いに興味をもたれる方も多いことでしょう。

また、未発表と思われる草稿もあります。是非、これら

の習作を多くの方にご覧いただきたいと思います。

（学芸課長／津田加須子）

さて、当館には酒との関わりの深い顕彰作家がたくさんいる。彼らの目を通して語られる酒と人々との関わりや、人々の酒と向き合う日々の暮らし、これらはまさに文学作品であると同時に文化でもある。さらに、こうした多くの作品は、酒が、作家自身をも含め人々に喜び、哀しみ、苦しみ、救いをもたらす有り様を、私たちに力強く鮮やかに伝えてくれるようだ。

これからも、超下戸の私は、現実として自らが酒によって人生至福の時を過ごすことは多分叶わないだろうと思いつつも、こうした古代からの先人達の作品を通じて、その酒を味わうことにより、至福の時を持てるのではないかとひそかに期待をしているところである。

酒と文化と文学と私

岡崎順子

館長室から

展 覽 会 報 告 !

好評のうちに閉幕しました！

文化祭

開館20年の軌跡と その未来

▲展示室風景

高知県立文学館は、平成29年11月2日、開館20年を迎えました。当館では、20周年を記念し「文学館の文化祭」展を開催。所蔵品約7万点の資料の中から、幸徳秋水、馬場孤蝶、上田秋夫、森下雨村、黒岩涙香、有川浩、志水辰夫、寺田寅彦、小山いと子といった作家の書簡や原稿など関係資料を一堂に展示しました。会場を訪れたお客様は熱心に展示を御覧くださいっていました。

高知出身の声優小野大輔さんが朗読する「土佐日記」のコーナーには、20歳前後の小野さんのファンの方々が足を運んでくださいました。2時間待ちにもかかわらず、番がくとも華やかな雰囲気に満ちていました。約35分間の朗読に聞き入っており、館内は、とても華やかな雰囲気に満ちていました。寅彦の言葉に「好きなもの、いちご」、「ヒー、花、美人、懐手して宇宙見物」があります。企画展示室の一角にプラネタリウムのコーナーを設け、NPO法人こうち音の文化振興会の北村真実さんが作曲した『藤並の森』という曲を流しました。来館された方々は室内に静かに流れる美しい音楽に耳を傾けながら、宇宙への思いを馳せておられるようでした。

また、20周年に向けたメッセージージを、猪野睦、高橋正、嶋岡晨、山本一力、藤原紺沙子、有川浩、畠中恵、志水辰夫、中脇初枝、西村繁男といった先生方からいただき、21年を迎える文学館にとって、大変励みとなりました。



▲文学散歩で解説するカルチャーサポーターの丸田さん(中央)



ところで、文学館には72名（平成29年4月1日現在）のカルチャーサポーター（文学館ボランティア）がいます。

①文学散歩 ②朗読の会 ③資料整理
④草の根広報 ⑤おはなしキャラバン
⑥イベント補助 があり、展覧会ではその活動もご紹介させていただきました。イベントとしては、文学散歩班第一期生が作成した「高知文学探索徒步図」を元にした「文学散歩」や歴史関連中心に企画した「れきぶん散歩」を実施し、多くの熱心な文学ファンや歴史ファンが約2時間の行程をお楽しみくださいました。

その他、朗読や紙芝居を楽しむ「耳和ぐ」、坂東真砂子原案の「朱花の月」の映画上映会など皆さまのご協力の中、無事終了致しました。心より御礼申し上げます。
文学館は、20周年を迎えるとともに、気持ちも新たに次への第一歩を歩みだします。今後とも、宜しくご指導賜りますようお願い申上げます。（学芸課長／津田加須子）

その他、朗読や紙芝居を楽しむ「耳和ぐ」、坂東真砂子原案の「朱花の月」の映画上映会など皆さまのご協力の中、無事終了致しました。心より御礼申し上げます。
文学館は、20周年を迎えるとともに、気持ちも新たに次への第一歩を歩みだします。今後とも、宜しくご指導賜りますようお願い申上げます。（学芸課長／津田加須子）

企画展 案内

酒と文学展 ~『土佐日記』から吉田類まで~

2017 11/25(土)～2018 1/14(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円



「二十歳の文学館」を記念し、吉田類さんをはじめとする高知の作家たちと酒にまつわる物語をご紹介します。酔いどれ文学の味わいをお楽しみください。

展覧会の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。



予告
1月～3月
開催！

上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展

2018 1/27(土)～3/25(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円

2014年に国際アンデルセン賞作家賞を受賞した上橋菜穂子さん。代表作〈精霊の守り人〉シリーズに描かれる多文化共生を軸として、その卓越した物語世界を紹介します。

楽しいフォトスポットや「精霊の守り人」スタンプラリーなど、作品の世界観を味わう
魅力的な関連イベント計画中！ 楽しみにお待ちください。



絵◎佐竹美保
『サクヒテユコ—混じり合う世界—』2016年

これからの文学館を盛り上げる、素敵なグッズ続々登場！



当館は11月2日に開館20周年をむかえました！11月3日(金・祝)～5日(日)には日ごろの感謝をこめて「文学館まつり」を開催。たくさんのお客様に遊びに来ていただきました。お客様、関係者の皆さま、本当にありがとうございます。この節目の年に、オリジナルグッズが続々登場！どれも職員が企画・制作し、大変好評をいただいております。来館記念や贈答品に、ぜひご利用ください。

●寺田寅彦「いちご図風呂敷」 2000円(税込)

寅彦のイラストや言葉に触れてください。使い方は色々♪

●寺田寅彦「いちご図マスキングテープ」380円(税込)

人気の「いちご図」がかわいいマステになりました♪

●文学館ロゴ入りボールペン 800円(税込)

高級感のある真鍮製のキャップ式ボールペンです♪

●オリジナルクリアファイル 各250円(税込)

「いちご図」と犬猫イラストの二種類。A4サイズです♪



利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日 年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料 一般360円 企画展はそれぞれ異なります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下無料。
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、
精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者
健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail : bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
<http://www.kochi-bungaku.com>

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス「県庁前行」
「高知城前」下車、北へ徒歩5分または
「高知駅行」「はりまや橋」下車、徒歩20分
- JR高知駅下車、徒歩20分（または連絡バス・路面電車を利用）
- 路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
- バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

フェイスブック好評配信中！ [Facebook: https://www.facebook.com/kochi.literary.museum](https://www.facebook.com/kochi.literary.museum)

